とある科学の万能能力(ロットスキル)

stringHz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の万能能力^{ロットスキル}

【Nコード】

N6818I

【作者名】

stringhz

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録、幻想殺し「上条当麻」。とある科学の超電磁砲、超電磁砲「御坂美琴」。そして次は複数の能力を扱える能力者！？ロットスキルという能力を持つ主人公の物語。

まだまだ小説初心者ですが、宜しく願います。（この物語は、禁書目録、超電磁砲のキャラは登場していますが、オリジナルな設定もあります。原作のイメージを壊したく無い方はお戻り下さいませ。）

登場人物、用語紹介―1―（前書き）

物語上の一部で登場する人物については―2―に掲載してあります。

登場人物、用語紹介ー1ー

主な登場人物

上にであればあるほど、今回はよく活躍します。

見ればお分かりの通り、柵川中学でのキャラが主になっています。以降、主人公に関わり続けるオリジナルキャラをさらに登場させるかは検討中です。

・下積林斗（しもせき りんと）

本作の主人公、中学2年生。柵川中学校在学、複数の能力を使用できる万能能力者（ロツトスキル）で、主な念動力能力者（サイコキネス）であるが、稀に守護能力（バリアガード）、肉体再生（オートリバース）を使用する。しかし、本人は何故3つも能力が使えるか分かっていない。念動力でなら大能力者（レベル4）だが、万能能力者が正式な能力名であると決定された場合は超能力者（レベル5）第五位相当の素質であるとのこと。風紀委員ー二九支部からー七七支部に人事異動（柵川中学校にー七七支部があるため）することになった。そのため最近黒子や初春と共に行動する事が普通である。ハッカーとしての知識も多少ある（初春の半分程度の知識）ため、一部の人間からは万能人間と呼ばれている。能力に必要とする数学、理科、能力開発、体育は優秀であるが、国語、社会は苦手である。

多才能力（マルチスキル）との違いは下を参照。

・初春飾利（ういはる かざり）

中学1年生。柵川中学校在学、低能力者（レベル1）で、所持能力は不明。現在明かされている時点では、頭の花と能力は関係ないとのこと（とあるラジオの超電磁砲より）。風紀委員として、多少危険を任されたりする等、割と物語で重要な立場となっている。第1

部、書庫侵入事件では、事件後に解析不可能なプログラム「CWP」(以下参照)を開発。ネットでは「守護神(ゴールキーパー)」と呼ばれるハッカーである可能性がある。甘い物が好きであるが、大抵誰かに邪魔をされ、食べられない事が多い。

・佐天涙子(さてん るいこ)

中学1年生。柵川中学校在学、無能力者(レベル0)である。能力の素質が今のところないが、能力を使える人が羨ましいと思いい、幻想御手に手を出して能力を開花させようとするなどをしてしまう。ネットで、興味ある事を調べる事もあり、時々学園都市で起きている事件に関連する情報を提供し事件解決へ向かった事もある。初春へのスカート捲りは挨拶代わりとなっている。心優しく(正義正しい)、連れ去られようとしている子供を助けたりする等の一面もある。だが、風紀委員になろうという気持ちはないらしい。どうやらひとついはいじめ(漢字不明)のファンのように、音楽をDLした上に、抽選で100名に当たるプレミアムグッズの応募券の入ったアルバムも購入している。

・御坂美琴(みさか みこと)

中学2年生。常盤台中学校在学、超能力者(レベル5)の第三位。超電磁砲(レールガン)を使用する。レベル1から数々のカリキュラムをこなして今の地位に上り詰めた努力家。無能力者のはずなのに自分の電撃を打ち消す上条を気に掛け、いつも勝負とこじつけて彼に突っかかつてはいつも軽くあしらわれている。

・上条当麻(かみじょう とうま)

高校1年生。在学高校名不明。無能力者(レベル0)だが、右手には異能の力を打ち消す能力、幻想殺し(イマジンプレイカー)が宿っている。口癖が「不幸だ」であるほど、自他共に認める不幸体質で大小問わず様々なトラブルに巻き込まれる。インデックスを救っ

た際の『竜王の殺息』の余波によりそれまでの記憶を喪失している。このことは本人と冥土帰り、そして14巻で偶然知られてしまった美琴以外には隠している。

・白井黒子（しらい くるこ）

中学1年生。常盤台中学校在学、大能力者（レベル4）で、空間移動能力者（テレポーター）である。美琴を「お姉様」と呼び慕うが、その様はどう見ても憧れの域を超えている（特に外伝ではその傾向が強い）ため百合属性の気がある。ゆえにその邪魔をする者（主に上条と初春）に対しては敵意むき出し。

・禁書目録（インデックス）

10万3000冊の魔道書の内容を記憶している必要悪の教会のシスター。正式名称 Index - Librorum - Prohibitorium、魔法名は Dedicatus 545 である。シスターという立場から神に誓いを立てているが、食欲に負けたり、保護と称して無計画に三毛猫（スフィンクス）を拾ったり、見知らぬ女性から赤ん坊を預かって来たりと、上条から信仰心を疑われている。性格は直情的で先走りしやすく、さらには面倒臭がりで家事や炊事は一切手伝わない。

・一方通行（アクセラレータ）

本名不明。身長は168cm。長母音がカタカナで表記される。学園都市で7人しかいないレベル5の第1位、即ち学園都市最強の超能力者。学園都市で最も優秀な生徒であり非常に高い演算能力を持ち、能力もその演算能力に依存する。紫外線なども無意識の内に能力で反射しているため髪は白く、肌は色白で、瞳は赤色に近く、男か女かも分からない体型をしている。これは外部刺激を受けていないためにホルモンバランスが崩れているからではないかと自分で解釈している。

・妹達（シスターズ）

御坂美琴の体細胞クローン。一方通行をレベル6へ進化させる実験のターゲット役。外見は服装まで美琴そっくり（目の描かれ方などは違うが、それは劇中での演出に過ぎないようで、他の登場人物には見分ける事が出来ない）だが能力は美琴に比べ大幅に劣るため、電磁波を視覚化する軍用ゴーグルや多様な銃器を常備して戦力を補っている。当初は全部で20000(+2)体存在したが、1-10031号までは実験で死亡している。現在はクローン体特有の短命を克服すべく世界各国の研究機関で治療中。

・打ち止め（ラストオーダー）

一方通行を主人公とするエピソードにおけるヒロインにあたる。実際、外見年齢相応の我が儘や悪戯で一方通行を振り回す一方、シリアスな場面では一方通行に対する絶対的な信頼や親愛、それに理解と献身を示す。5巻の事件以後、一方通行の演算能力は彼女を管理者とするミサカネットワークで補っている。一方通行をとてよく慕っていて、いつも漫才のような会話をしている。彼女個人の喋り方は「 $\times$ 、 $\times$ ってミサカはミサカは $\times\times$ してみる（みたり）」¹。他の妹達と同じく淡々としゃべるが、表情は多彩で裸を見られれば焦る、子供らしい態度をとるなど最も人間らしい妹達である。

重要単語

オ리지ナルの場合は がついています。

・学園都市

本作の主な舞台。東京都の西部3分の1を占める、外部と隔離された巨大都市。内部は全部で23の学区に分かれ、最先端の科学が研究されており、風力発電用風車や清掃用・警備用ロボットの実用化等、学園都市の中と外では科学技術が20年から30年は違つとさえ言われる。総人口は230万人、内8割は学生。学生は全て能力

開発を受けている。独立記念日は10月9日で、学園都市内では祝日とされている。学園都市のバスは全てスクールバスであるため、バス停も学校施設の名前を使っている。学園都市には警察が存在せず、治安維持は専ら学生から選抜される風紀委員（ジャッジメント）と教員有志による警備員（アンチスキル）によって為されている。風紀委員や警備員以外の者は、たとえ強大な力を持つ超能力者（レベル5）の美琴でも「一般人」と呼ばれている。

・風紀委員（ジャッジメント）
学園都市の治安維持に努める学生選抜の集団。風紀委員のメンバーは盾のマークがある腕章を付けている。風紀委員には、「9枚の契約書にサインする」「13種類の適正試験を受ける」「4か月に及ぶ研修を受ける」を経てやっとなれる。
風紀委員に所属している学生には、下積林斗、初春飾利、白井黒子などが登場。

・警備員（アンチスキル）
学園都市の治安維持に努める次世代兵器を装備した教師陣。ヘルメットにはさすまたのようなマークがある。警備員になる方法は風紀委員になる方法と同じ。

・能力者のレベルは、以下のように分類されている。
レベル0（無能力者）、レベル1（低能力者）、レベル2（異能力者）
レベル3（強能力者）、レベル4（大能力者）、レベル5（超能力者）

・レベル6（絶対能力）、レベル7（過剰能力）
学園都市には1人もいない能力のレベル。計測は不可能である。
レベル7の能力を使った者は、その力に自分自身が耐えきれなくな

り、
最終的には死に至る可能性もある。

・幻想御手（レベルアップ）
ネット上の都市伝説のようなもの。

能力のレベルを簡単に引き上げる事が出来る道具だと囁かれている。

・幻想御殊一（レベルアップ）
幻想御手（レベルアップ）の偽物。

一時的にレベルが3、4程あがるが、すぐに意識不明になってしまう。

・多才能力（マルチスキル）
複数の能力者の脳を電子信号でつなぎ、1人の人間の元に集めた能力。

・万能能力者（ロットスキル）
1人の人間が複数の能力を使用できること。ただし、使用能力が多すぎると、

本来の能力の強さが失われてしまう。適度な能力数は2、3個といわれている。

・肉体再生（オートリバース）
肉体の損傷をある程度回復させられる能力。

・念動力（テレキネシス）
見えない力で離れたものを動かす能力。

レベル4になると1トンのトラックを動かせるようになる。

・守護能力（バリアガード）

自分よりレベルの高い能力以外を反射する能力。

効果時間は攻撃されてから数秒から20秒で、以降はもう一度演算の必要がある。

ただし、テレポートなど、自分自身に接触しない能力は反射できない。

また、レベル4以下ではイコールスピードを防ぐのが最も演算が難しい。

- ・CWP（シーダブリュープログラム）

正式名称 an Crash Wall Programmer（アンクラッシュウォールプログラマー）。書庫のデータの見直しの際に導入し、さらなるクラッカー対策として利用。開発者は初春飾利で、解析を試みる者もいるが、未だ解析が5%に達した者はいない。以降、書庫へのクラッカーに成功した人は1人も居ないとされる。

- ・ハッカー

コンピュータや電気回路一般について常人より深い技術的知識を持ち、その知識を利用して技術的な課題に対して最小限の手間で最大の効果を生み出す人々のこと。

- ・クラッカー

情報の破壊や不当な複製、アクセス制御の突破など、不正な利用を行うハッカーもどきに対する総称。

ハッカーは犯罪者ではない。犯罪者の正式名称はクラッカーということ。

登場人物、用語紹介ー2ー

ー2ーは、物語のストーリー中に登場するキャラクター及び用語の紹介で、

ー1ーと違い、登場頻度が低い物です。

物語で初めて登場した物は情報が載せられません。しかも詳細で。ネタバレには御注意を。

人物

・内々 灯(うちなか とう)

書庫へクラッキングを仕掛けた犯人。使用能力はレベル1の高速演算(スピードナンバー)。しかし、その能力は下積の演算能力をかなり下回るため、風紀委員のシステムへクラッキング中に場所を特定され警備員(アンチスキル)に拘束された。

・内々 倉樹(うちなか くらき)

灯の兄で、灯が捕まった後に、風紀委員のシステムへクラッキングをした犯人。使用能力はレベル3の高速演算。能力使用時は初春の演算能力をも上回るが、連続使用可能時間は10分で、以降30分の休憩が必要になる為、休憩中に初春と下積の協力によってやはり場所を特定、黒子によって拘束された。弟とは別の場所におり、クラッキングを弟にさせた黒幕であった。以降は初春によってCWPが開発された。

用語

・高速演算

レベル3であれば能力を使わない一流のハッカーである守護神を上回る能力をえられるが、相当な集中力が必要になる為、最高10分

までしか連続で使用できない。

各章あらすじ／第一部から第三部（前書き）

見にくいのはごめんなさいm()m
執筆の内容によっては変更になる可能性がありますのでご了承下さい。

各章あらすじ／第一部から第三部

第一部 高速演算編

序章 人事異動

一二九支部から一七七支部へと異動になった下積。早速、次の日に待ち構えていたものとは？

第1章 侵入者

書庫の侵入者をつきとめるには、次の侵入を待つしかなかった。だが当然うまくいくはずもなく……。

第2章 黒幕

侵入者の犯人が判明。逮捕されたが、依然風紀委員のデータに不正アクセスを試みる者が居た……。

第3章 高速演算

結局犯人は特定できたものの、相手は高速演算のレベル3。相手を攻撃する能力も備えていた……。果たして、下積の初対決の結果は……？

終章 CWP

セキュリティを強化する為のプログラムの開発を初春が担当する事になった。

第二部 下積の出会い

序 章 超電磁砲と幻想殺し

常盤台のレベル5と、高校生レベル0との対決を見かけた下積。そこで下積が見たものとは…？

第1章 常盤台

レベル5の御坂美琴と、初春、佐天、黒子が知り合っていることを聞かされ、下積は3人についていくこととなる。

第2章 妹達に幻想殺し

ある人に良く似た人に出会う下積。そしてその後、たまたま街を歩いていた下積は、この前みたレベル0とばったり出会う。

第3章 禁書目録

上条当麻の家には、「インデックス」と名乗るシスターがいた！一体このシスターの正体は…？

終 章 下積日記

これは、下積のとある日常をつづる、下積によって書かれた日記である。

第三部 科学変則編

序 章 爆発

最近第七学区で爆発が後を経たない。どうやら、以前にあったグラビトン事件とは少し違うようである。

第1章 万能能力者

たまたま下積が立ち寄った店に爆弾が仕掛けられた。犯人の真の狙いは何なのか。そして下積の運命は!?

第2章 科学変則

ウランチェンジ

犯人の能力名はウランチェンジ、無理矢理化学変化を起こす事でエネルギーを放出するというものだ。

第3章 警備

犯人の狙いは、能力を持っているものの誰かだという。下積は、周辺の警備を行う事になった。

第4章 許せないこと

犯人の狙いは、睡眠爆弾を利用し、標的を捕獲し、その能力者の能力を吸い取り、利用するという事だった。その犯人の発言に、下積が激怒する。

終章 気楽と苦難

事件は解決した。その次の日の小話。

第一部 序 章* 人事異動

彼は今まで、うんざりしていた。

学校が終わると、駅に向かい、第7学区ローカル線で3駅。さらに乗り換えで、第4学区の中樞駅まで3駅乗り、そこからさらに乗り換えて2駅。電車を降りると徒歩で10分。風紀委員一二九支部はそこにある。

電車は乗る駅の数3、3、2と、寝てもいられない。幸い、学園都市が都市外より20年、30年発達していることで、3駅といつても五分かからないだろう。つまり、所要時間はおよそ25分程度歩いて行ったら1時間は普通にかかる距離である。

それを非番である日曜日を除いて毎日行う。さらに同僚は全員男で、一二九支部のリーダーはとても厳しい。資料の誤字が1つあるだけで叩いてくるという人であった。

彼は、それとはもうおさらばだった。

彼は荷物を段ボール1つにまとめて、その異動先へ持って行くことにしていた。

新しい場所は、教室から徒歩30秒。それはそうである。

彼の異動先は、彼の通う学校にあるのですからだ。

『風紀委員活動第一七七支部 JUDGMENT 177 BRA
NCH OFFICE』と書かれた看板。

「さて、ここか……手が塞がっている。」

彼は一旦荷物を降ろし、床に置く。そして、ドアを開けた。

「失礼します、今日から人事異動で177支部配属になりました、下積林斗です」

部屋には、手前側に高校生の制服を着た女性が一人。そして、手前の向こう側に、頭に花を沢山のせた女の子、この学校の生徒がいた。

「あら、君ね、待っていたわ、君の席はあそこ。それと私は固法。よろしく。」

と、固法と名乗る女性は丁寧に下積の席を教えてくれた。下積は段ボールを持って、自分の机へと向かった。

「あ、そういうえば飾利の活動支部は177だったっけ。」
頭に花をのせた少女、初春飾利は活動日誌を開いて読んでいたようだ。

「そうですね、今日から宜しく願います。」

「なんか、もともとクラスメイトだから、複雑だよな。」

初春は、頭の上に花をのせているのが特徴。後ろ姿で一瞬ですぐに分かる。そして、彼女は、下積のクラスメイトでもあった。

「そうですね。」

初春は少し笑う。さて、と下積は段ボールから荷物を取り出す。荷物を減らす為、必要最低限のものを持ってきていた。

筆記用具、風紀委員の腕章、マニュアル、手帳、仕事用のノートパソコン。

あとは、後で揃えれば大丈夫なので、とりあえずこの5つ。

引き出しは勉強机のように複数あるため、スペースがかなり余った。下積が荷物を整理し、段ボールをつぶしていると、ドアが開いた。

「パトロール終了しましたわ、異常無しですの。」
独特な話口調だった。制服は常盤台。髪の毛の両側をリボンで縛っていた。

「誰ですの？貴方。」

唐突に聞かれたので、下積はちょっと驚いていた。

「白井さん、昨日いったじゃないですか、今日から新しく配属になる下積さんですよ。」

下積は、驚きで言葉がでてこ無かったので、初春が助け舟をだす。すると黒子は「ああ、そういうば」と頷いた。

「それで、下積さんとやらは、能力のレベルと能力名はどうなんですかの？」

下積は流石にもう落ち着いていた。普通の対話のような状態で返事を返す。

「レベル4で、能力は念動力、サイコキネシス、バリアガード、オートリパース、守護能力、肉体再生です」

「な、何ですのそれ？1人の人間が複数の能力を使えるはずはありませんのよ？」

黒子は問いかける。確かに、1人の人間が複数の能力を扱えることはない。学園都市を捜しまわっても、100人中0人は当たり前である。

「確かに、そうですね。でも、俺はその3つの能力を扱えるんです。まあ、メインは念動力サイコキネシスですが」

「どういうことですか、それ？」

「俺も良く分かりませんが、万能能力者ロッドスキルと呼ばれています。未だ研究中みたいです。実際、研究が終わり、もしこの能力が超能力であると認定された場合、俺はレベル5第五位相当の力量になります。現時点では正式に認定されてませんから、メインの能力のレベルであるレベル4になっています。」

「と、いうわけで下積さんは柵川中学のEースなんですよー」

「まさかそんなのが本当にいるなんて驚きですよ」

下積が言ったように、万能能力者ロッドスキルは未だ研究中である。万能能力者ロッドスキルが使えるようになるには、努力以前に素質が必要であつたりなかつたりするらしい。それを明かす為、彼は研究対象にされているわけである。1人だけクローンが作られた。これで人間クローンが作られたのは2人目だという。

下積は柵川中学のEースでもあつた。しかしながら能力測定は大変システムスキャンで、身体検査システムスキャンの時には他の生徒に比べて2、3倍の検査が必要である。

下積は、初春、黒子、固法の3人にここでの仕事について教わった。もう夕方となっていた。4人は仕事を終え、帰ることになった。

下積と初春が右、黒子と固法が左だった。

「ああ、支部が近いっていいなあ」

「そういえば、下積さんは異動前はとても遠かったんですね」

下積と初春は同じ風紀委員でクラスメートであるため、面識があつ

た。

「ここから徒歩で1時間程度つてとこかな、電車使つても25分だ。まあ、幸い交通費は、むこうで負担してくれるからよかつたんだが。」

「でも、往復50分てことは大変ですよね、あ、佐天さん！」

見ると、50mぐらい先に、佐天がいた。下積、初春のクラスメイトで初春とは親友である。

「お、初春、おつかれさーん！」

佐天が初春のスカートへ手を伸ばす

「待て、俺がいるぞ」

捲られる前に注意を促す。佐天がいつも初春のスカートを捲る事は下積は聞いた事があつた。

「そうですよ！やめてください」

佐天は仕方ないなあといつて捲ろうとするのをやめた。

結局は3人で帰つた。そのときにそんなことがおきていたのも知らず。

次の日の朝、下積は学校へ到着すると、初春が駆けて下積のもとへ駆け寄り

「大変です！書庫のデータに何者かが侵入しました！」

「何？」

すぐさま、下積と初春は風紀委員室へと向かつた。まだ誰もいない。書庫のデータを入力するのは本部であり、それを管理するのは一七七支部である。見ると、書庫のサーバーに、警告と出ていた。

「どうやら、書庫のデータが勝手に変えられてるみたいです。幸い、バックアップはとつてありますが、例えば・・・」

『下積林斗 絹山中学校1年 レベル1 使用能力：空間移動能力』
「俺のデータ……」

書庫は、学園都市内全ての能力者のデータが記載されている。これを利用して、超能力が関わっている事件を解決したりするのである

が、これが間違った物であると、犯人が特定できなかったり、誤認逮捕になったりしてしまう可能性がある。そのため、これは嚴重に高度なセキュリティで守られている。そのセキュリティを破った者がいるということである。

「飾利、犯人は特定できないのか？アクセス履歴を調べればどうにかなると思うんだが」

「残念ながら、履歴は完全消去されてしまっています。特定は再度相手が侵入してこない限り、不可能です」

「つまり、今夜は徹夜ってわけだな。」

初春はコクリ、と頷く。風紀委員は、事件を解決する為に時には徹夜しなければならぬこともある。その際は、学校長へ申請をすることで、授業を欠席する事ができる。それは事情欠席扱いとなり、普通の欠席とは違う物ではある。

「相手の侵入時間は推測からして夕方6時以降だが、監視はどうする？」

「えっと、白井さんと固法先輩に連絡入れてきます。」

初春は自分の携帯を取り出し、2人に電話をかけていた。

下積は、自分と初春の、風紀委員活動事情欠席書を持って校長室へと向かった。

第一部 第1章* 侵入者（前書き）

今章は御坂美琴を初登場させました。（この小説内で）
文章はまだまだ未熟者ですが、そこは勘弁して読んであげて下さい。

「毎度毎度同じこというけど、プールを緩衝剤にしないとろくに検査もできないなんてねえ」

常盤台のEース、『超電磁砲^{レベルガン}』御坂美琴、学園都市7人のレベル5の第三位である彼女は、愚痴を言った。

「そうですね…私これから風紀委員のお仕事がありますの」

黒子は、割と急ぎながら、真剣な表情で美琴に言った。

「え？これからまだ授業があるのに？」

「授業なんてやってられませんの。どうやら書庫のデータ^{バンク}を勝手に変えた人がいるらしいんですよ。」

「ふうん、大変ねえ、よかつたら私にも手つ「駄目ですの」

美琴の言いたい事は分かつたらしく、途中で黒子が言葉を遮った。

「つまんないの……あ。初春さん待っているんじゃない？」

黒子が本来の目的を忘れていたようだったので、美琴は言った。

「あ、そうですね、じゃあお姉様、言って参りますわ」

そついうと、黒子はレポートを使って一七七支部へと向かった。

3

「お邪魔します！初春、宿題教えて」

午後3時、外からかすかに聞こえる終業チャイムの音と同時に佐天が入ってきた。

「すみません佐天さん、いまそんなことをしている暇がないんですよ。」

時間帯的に、書庫の状態の監視は今は初春担当だった。佐天は少し留まるうとしたが、なら仕方ないかといって帰宅しようとした。

「飾利、監視代わってもいいぞ」

すかさず下積は言った。初春は「でも」と留まったが、最終的には監視を交代し、初春は佐天に勉強を教える事になった。

「んーと、xに4、yに8を代入して、 $4a \parallel 8$ で、 $a \parallel 2$ になるので、 $y \parallel 2x$ です」

余談ではあるが、学園都市内の学校とそれ以外の学校の大きな違いは、「能力開発」というカリキュラムが組まれているかいないかだけである。あとは、外の学校と学ぶことは一緒であり、現在は1年の関数の内容、比例と反比例という内容を勉強している。他に違うことと言えば、社会の歴史の内容に、学園都市の歴史が含まれているか含まれていないかである。

「身体検査の後の1時間の授業は抜けてきましたわ」
扉が開いて、黒子が入ってきた。

「それで、犯人の目星はつきそうですか？」

初春は佐天に勉強を教えていた為、下積が状況を説明した。

* 4 *

時刻は夜。下積は4人分の夕食を買う為にコンビニへと出かけていた。
弁当を4つ購入し、レンジで温めてもらい、保温装置を利用して帰る最中だった。

「まだ9月だと言うのに、寒いなあ」

今は9月。外の気温は23度だった。柵川中学から一番近いコンビニまではおよそ500m。あつという間につく距離ではある。

「ただいま。外寒いぞ。」

下積は弁当を保温装置から取り出すと、箸と一緒に3人へ弁当を渡していた。

「しかし、夜は他の生徒がいないせいか、余計静かに聞こえるな。」
このままでは間がもたないので、下積が話を切り出した。

「そうですね」「そうね」「私はよく分かりませんわ」

会話終了。静かで微妙に空気が重い。かといって、のんびり雑談もしてられないので、どうしたらいいのか誰もわからなかった。

気付くと夜の10時になっていた。夜中も監視し続けなければならぬので、監視をするもの以外は就寝することとなった。

監視の順番は、黒子 固法 初春 下積の順ということになった。

下積は目がさめた。4時半になっていた。下積は一度1時に監視を交代したものの、誰かが不正にアクセスを仕掛けてくることはなかった。

カーテンをあけると、パソコンの前で初春が監視していた。寝る際には頭の花はずすようで、今は頭に何もせていない状態となっていた。

「怪しいアクセスはあったか？」

下積が聞くと初春は横に首を振った。どうやらクラッカーは犯行を1回のみと限定していたようだ。

「本当に、犯人の特定は不可能なのか？アクセス履歴が消されても、どうにか復旧することはできないのか？」

ファイルをもし消去してしまっても、復旧できることがあるように、履歴も復旧できるのではないかと下積は考えた。しかし、書庫（バンク）のプログラムは簡単には改悪されないように複雑になっているので、復旧にはかなりの時間と技術がいることは当然である。その間に仕掛けられた場合、中断はできない為、さらに書庫のデータ（バンク）がおかしくなってしまう。

「このまま待つていてもどうにもならないので、やるだけの価値はあるかもしれません」

「だろう。飾利の技術があればできるさ。俺も手伝う」

そして、書庫（バンク）アクセス履歴復旧作業が始まった。

初春はメインパソコンでコマンドプロンプトを開き、プログラムを打ち始めた。

下積はサブのパソコンで書庫（バンク）に接続し直し、アクセス履歴が消去された時間などを記録した。

「キーボードの音がうるさいですの……何をやっているんですの？」

「アクセス履歴が復旧できないか試しているんです。」

初春は一言言うともう一度画面に集中した。黒子はそれを悟り、無

言でまた休憩室へと戻って行った。そして、すれ違いに固法が来て、見ただけで状況を読み取り、下積と初春にお茶をいれてくれた。

「2人とも頑張ってたね」

そういうと、固法はまた休憩室へと行った。

初春は少し本気を出しているようで、手の動きがよく見え、残像だけが残っていた。画面を見れば、1秒、2秒程で次の行へ進んでいた。

作業開始から10分、初春は手を止めた。

「書庫パスワードNo. 19384のパスワードはいくつでしたっけ？」

書庫には、いくつものセキュリティがあるため、全部でおよそ2万5000種類のパスワードが設定されている。セキュリティは万全だが、パスワードを忘れてしまうと大変なことになる。

下積は、パスワード一覧のページにハッキングを仕掛け、枠に19384を入力し、検索を押した。パスワードは*****
*****であった。

「パスワードは*****です。暗号化して*****
*****ですね。」

「あ、はい！」

初春はパスワードを入力し、作業を進めた。そしてまた5分。初春は手を止め、チェックをしばじめた。

「一通り入力し終えたので、チェックをお願いします。」

全部で37565行。目を凝らして下積はチェックを行った。18782行、accessがaccessになっていた。

「ここ、cが無いぞ。あとはOK。」

「有難うございます。」

初春はそこを訂正し、エンターキーを押した。

下積が書庫を見ると、アクセス履歴が一気に表示された。

「飾利、復旧したぞ」

そう言って下積は不審なIPを見た。192.321.46.21。

これだ。

風紀委員からのアクセスは122・9xx・xx・xxとなつて
いるため、すぐ分かった。

初春は再度コマンドプロンプトを起動し、192・321・46・
21へと接続した。

「容疑者の氏名は内々灯うちぢなかとんです。所在地はここに」

そして、犯人が判明した。

第一部 第2章*黒幕

1

下積は紙切れを右手に、歩いていった。

何のなのかもわからない。相手の動機は一体。

犯人、内々灯は何の為に。

書庫のデータを変えられても、元に戻すには多少の時間はいるが、バックアップがとつてあるため、難しいことでは無い。

今も風紀委員室に残っている黒子と初春が復旧作業を行っているはずである。

それに、いくら悪戯にデータを変えたところで、何のデメリットもないはずだ。

であるならば、犯人には別の目的が？

書庫のデータを変えて、そして風紀委員をそちらに集中させることで、

何か大きなことでもしようとしているのだろうか。

なら、もしそれが今進行中だとしたら？犯人の次の狙いは？

下積は、犯人ー内々灯の住んでいる家に到着した。

2

「御苦労、あとは私に任せろ。データパスワードは*****で頼むぞ」

灯は電話を切った。ついに解読が終わった。

灯はパソコン画面を開き、ブラウザを開くと、解読済のデータファイルを

zip形式で圧縮し、パスワードをかけて、アップローダーにアップした。

直後、ブラウザの更新ボタンを押す。そのファイルのDL数が1になったことを確認し

そして、そのファイルを削除したのだった。

ブラウザの履歴と、必要で無くなったデスクトップにあるファイルを削除し、

以降復旧できないように完全消去した。

直後、ドアが叩かれる音がした。

「すみませんが、内々さんのお宅ですか？」

男の声。灯はパソコンの電源を落とし、そうして玄関の穴から外をのぞいた。

(げ……風紀委員……ちっ)

灯が扉をあけると、男は告げた

「風紀委員です。任意同行願えますか？」

灯は応えた。「俺が何かしたとでも？」

男は、冷静に何のためらいも無くその問に応えてきた。

「先日、書庫のデータを勝手にいじくっただろう。電子情報不正操作条例違反だ」

電子情報不正操作条例違反。前文は以下の通りだ。

『いかなる場合であっても、正当防衛を除いて、電子情報に不正に干渉した場合、もしくは操作した場合は、懲役20年以下もしくは5千万円以下の罰金となる。』

灯は落ち着いていた。アクセス履歴は消去し、プログラムで復旧できないようにしたはずだ。犯人が簡単に判明するはずも無い。まだたった1日だ。灯はそう思った。

「ふ、電子情報不正操作条例違反ねえ。この俺が？証拠はあるのか」だが、男は、その証拠を叩き付けてきたのだ。

「書庫にはアクセス履歴があるのは知ってるだろう。そこから見破った。馬鹿だねえ、アクセス履歴を消去し忘れるなんて」

灯は動揺した。確かに消去したはずだ。何度も確認したはず……！
「そんな馬鹿な！俺は確かに履歴を消去したは……！！」

男は笑った。「ほほう」と。

「だ……騙したな!!」

男は平然としていた。だが、灯は不思議に思った。確かにプログラムは完璧だった。復旧はそう簡単には行かない。一流のハッカーが風紀委員にいても？

「君は、守護神を知っているか？」

灯はその言葉にびくりとした。思い出したのだ。6月の第2金曜日。ハッカーやクラッカーの間では知らない人はあかりいないだろうあの工山が逮捕された。

どうやら工山は守護神に挑もうとして、勝ったと思つて油断したところを逮捕されたらしい。

工山は4800万円の罰金で済まされた。工山はその後、ネットの大型掲示板でこう書き込んだらしい。

『守護神は、風紀委員のとある詰め所に所属する少女かもしれない』と。

まさか。

「まさか……!?!」

やはり男は表情を変えず「そうだ」というと、手錠を取り出した……「簡単に捕まつてたまるかよ!」

3

「簡単に捕まつてたまるかよ!」

内々灯はそう告げると下積へと殴りかかってきた。

下積はそれをなんなく回避した。3発、4発と相手は殴り掛かるがそれをかわしていく。

(このままじゃ道路へ飛び出してしまうな)

下積はこの家の庭、裏へと走った。当然攻撃することに夢中になっている内々はそれについてきた。

ところが、今まで殴り掛かってくることしかしていなかった内々は、

右手から水を放った。

「くっ」

下積は完璧に油断していた為、紙一重でそれをかわした。

(このままじゃ拉致があかない)

そう思った下積は、能力を使うことを決断した。頭の中で演算し、その結果を導きだし、そして相手を

宙へうかせた。

「ね……サイコキネス念動力能力者!？」

サイコキネスの能力が働いている為、灯は行動できない。

下積は、灯のもとへと一歩ずつ近付いて行く。

「もっと上までいって落とされるのと、連行されるの、どっちがいい」

灯は、敗北を確信した。

「幻想御手でも叶わないか。参った。」

そうして戦いはすぐに決着がついたのだった。

* 4 *

犯人を拘束し、それを警備員に引き渡すと、すぐさま一七七支部へと戻った。

幸い、昨日は金曜日の為、今日は学校が無い。非番は明日なので、きょうは頑張るしか無いか。と思いながら下積はドアを開けた。

「犯人を確保して、警備員に引き渡してきました。」

それと同時に固法が告げてきた。

「それなんだけど、こんどは風紀委員のシステムへ仕掛けられているの」

「何？」

下積はパソコンの方を見る。見れば今度は黒子がサポートにあたり、初春がなにやら忙しくキーボードで文字を入力していた。

下積は、「はっ」と気付いた。

先程、灯に手錠を仕掛けた時言っていた言葉があった。

『俺を捕まえただけで、事件が解決すると思っただら大間違いだ』
なる程。そういうことか。この事件には黒幕がいる。それだけ。

「犯人の目的はこれを行う為の時間稼ぎにすぎなかったってことなのか？」

ここは、噂ではとある詰め所と呼ばれているらしい。確かに先月から書庫の管理はこちらが行っているようだが、それ以前から、もう既にここはそう呼ばれていた。何故ならば、この支部は他のシステムに比べセキュリティが格段と強い。

「この支部の風紀委員システムに簡単に入り込んだということはかなりのクラッカーです」

初春も焦っていた。今まで1人もクラッキングを仕掛け、侵入してきた者は1人もいないはず。それが撃ち破られたのだから、相当な能力があるということになる。

「対策はとっているのか？」

「一時的に、この風紀委員のシステム、データを暗号化しました。」
無難な対策をとったようだ。だがこれもいつ破られるか分からない。

「それで、犯人の目星は？」

「IP 193・206・114・23 となっていますが、どこを探してもこのIPの所在地が分からないんです。」

「識別番号詐称か」

識別番号詐称。もともと学園都市のコンピューターはDからSまでの端末用セキュリティランクと製造番号のようなものが刻まれており、そこから相手を特定できるが、相手がそれを詐称しているため、相手の情報に一切干渉できないのだ。

それに、このくらいの技能を持つ、学園都市のプログラム検定の1級は初春を含め、たったの5人。どうやらその5人全員にちゃんとしたアリバイがあるらしい。

つまり、犯人は導き出せないのだ。一体どうしたらいいのだろうか。このままだと、暗号化も解除されてしまい、情報が漏れてしまう。

そうしたら大変だ。風紀委員に所属する同僚の情報や、いままでに風紀委員が拘束してきた人の情報が外へ出て、取り返しがつかなくなる。

だが、誰もその犯人を割り出す方法を思いつくことができなかった。

第一部 第3章*高速演算

0

倉樹は、1台のコンピュータを分解し、中身を基盤から何もかも入れ替えた。

このパソコンは、これでIPがバレたとしても、所在地は判明されないはずだ。

PCの電源をいれ、昨日入手した風紀委員データシステムの弱点が調べられて記入されているメモを開くと、コマンドプロンプトを起動して、プログラムを入力しはじめた。

調べられたメモの中に192けたのパスワードがある。これを記入し、風紀委員データシステムに入り込んだ。

「やった！成功だ。これであとは……」

次の瞬間データの文字が次々と暗号化されていく。

「な…なんだこれは……」

折角侵入したのにも関わらず、次々と暗号化されていくデータ

「くそ！手間がかかるな」

倉樹は暗号化解読ソフトを起動し、そして暗号化の解読を開始したが……。

『ERROR 暗号化处理ソフト v2009.12にはこの暗号を解読できませんでした。』

との表示。

「くそ、自力でやらないといけないのか」

1

「どうしますの?」

もう手段はない。あるにはあるのだが、それをやってしまうと、後で始末書意外にいろいろと書かなければならないので面倒になる。

「過去にも同様の事件は無かったのですか？」

下積は固法に聞いた。事件簿を未だに確認していた固法は、言った。「ちよつと違うんだけど、過去に『高速演算』を利用する人が、風紀委員のデータを勝手に盗んだ事件があったの。」

「高速演算ですの？……初春ちよつと調べてみなさいな」

初春は書庫（復旧済）の検索欄に高速演算と入力し、検索した。

『該当する能力者を3名確認しました。』

みれば、内々灯、内々倉樹、支那川系子だった。

内々灯は逮捕されている。つまり、予測をすれば

「内々、倉樹。か。こいつじゃないのか？」

完全に犯人であるとは言い難い。しかしこうでもしなければ犯人の完全な特定は不可能なために逆に捜査に影響を及ぼす可能性もある。

「可能性はありますね。どうやら兄弟のようですし」

下積は内々倉樹の行動を探ることとなった。

* 2 *

倉樹の住み処はアパートの一室だった。

近くは人通りも少なく、隠れる場所もあったのでそこに潜んでいた。場所は割と広がったので、初春がノートパソコンを開いて作業をしても十分隠れられる程のスペースがあった。

初春はIPからのハッキングではなく、所在地から割りだすハッキングの対策はとられていなかったため、その方法で倉樹のパソコンにハッキングを仕掛けていた。

「何かあったら言ってくれるか？」

下積は初春に一言伝えたと、そのまま座っていた。そのまま数分の沈黙が流れる。そして、

「容疑者が書庫への不正アクセスの実行をしようとしています」

下積はそれを聞いた瞬間に倉樹のいる部屋へと走り出した。

インターホンを鳴らすと、30秒程おいて倉樹がドアをあける。

「ジャツジメントですが、ちよつといいですか？」

下積は丁寧に関手に話しかける。

「別に良いが、俺が何したっていうんだ？」

「パソコンの確認をしてもいいですか？」

倉樹が受け入れたので、下積は質疑する。

「どうぞ」

倉樹がパソコンを取り出す。下積はインターネットブラウザなど、隅から隅までを確認したが、書庫へのアクセスを試みようとした履歴が見られなかった。

「で、風紀委員さん。何もないなら早めに帰ってもらいたいのだが・

・・・」

「そういうわけにもいかないですよ」

そこに現れたのは初春だった。彼女は倉樹のパソコンでプログラムを実行する。数分後、デスクトップに無かったはずのファイルが現れた。

倉樹の表情が険しくなった。

「・・・復元したのか」

下積はまた初春と交代し、先程までなかったファイルを確認する。あつた。

「これを証拠とし、電子情報不正操作未遂の容疑で拘束します」

下積は手錠をとりだすと、倉樹は後ろに下がって

「おっと、そういうわけにいかないんだよなあ」

倉樹は手から小さい弾のようなものを放った。狙いは初春だ。

下積はとっさに初春の前に立つ。そして、彼の前に壁ができた。弾はその壁にあっさりとはじかれる。

「あなたの能力はそういうものか。攻撃はできないんだな」

「いいや。できるぞ。」

「ほづ、どつやって？」

「見せてやるうじゃないか」

「俺はレベル3だぜ、その能力からして見た目レベル2だ。勝ち目は無いぜ」

倉樹は余裕な表情で手から次々と弾を放っていく。

下積は壁をつくらない。代わりに、倉樹の放った弾が突然制止した。

「何!?!」

また倉樹から余裕な表情が消える。

「これ以上抵抗を続けるのなら、この制止したをあなたにうちこみますがどうしますか?」

あえての敬語で下積は忠告した。

「わ・・・わかった。従おう」

第一部 第3章* 高速演算（後書き）

なんか無理やりな感じになってしまったかもしれない。構成を少しミスしました；

第二部からは失敗を取り戻そうと思います。

第一部 終章* CWP

事件は解決した。

数日後、アンチスキルとジャッジメントによって書庫のセキュリティーの見直しがされ、それを初春が開発するとなった。おかげで一七七支部の人たちは全員徹夜作業である。

そして、an Crash Wall Programが開発された。暗証番号1つも文字がおよそ10万文字に暗号化されているため、いまだそのセキュリティーを破ったものはいない。

こうして、異動後初仕事は幕を閉じたわけだが、ここからいろいろな事件に巻き込まれいくのは言うまでもないことである。

第二部 序 章*超電磁砲と幻想殺し

「そういえば下積さん」

初春が下積へと話しかける。

「複数の能力の使用、あの時できていましたけど、自分の演算でできるようになったんですか？」

下積は少し考えてから答えた。

「いや、あれも偶然だった。元々庇うためだけに前に立つたから」

「そうなんですか。それにしても不思議ですね」

下積は事件の書類を片付けて、疲れたので外を散歩していた。

学園都市の天気予報はほぼ正確である。今日は雲ひとつない晴天であつた。

下積が川原の辺りの歩いていると、なにやら騒がしい声が聞こえてきた。

「逃げないでちゃんと勝負をしなさいよ！」

1人は女。制服での活動が定められているのか、制服姿であつたためすぐに何処の学校か分かつた。

レベル3以上の能力者が集まるお嬢様中学校、常盤台中学校の生徒である。

「だから俺はレベル0だつて！」

もう1人も制服姿。有名な学校ではないものの、制服の見た目からして高校生であつた。

そして、その2人に下積は驚いていた。

「な
」

常盤台中学の生徒がレベル0の人に向かって電撃を放っていた。

「常盤台中学のレベル5、超電磁砲^{レベルガン}・・・」

そして、もう1人も驚かされていた。

「と、都市伝説の・・・」

都市伝説、どんな能力も打ち消す男。その男がいたのだ。

レベル5の放つ電撃は、彼の右手によって効力を失ったのだ。

下積はそれをただ目を丸くしてみていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818i/>

とある科学の万能能力(ロットスキル)

2010年10月10日20時14分発行